

Project
Operation
Sight for
All

POSA 事業 報 告

No.16

●平成24年度



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



POSA 目 次



理事長の言葉

『男の滑走路』 POSA理事長 医療法人輝秀会 理事長 倉富 彰秀 P1

副理事長より

『有難うアルコンさん』 POSA副理事長 菊池眼科院長 井上 望 P2

ライオンズクラブより

『アイキャンプに参加して』 神埼ライオンズクラブ会長 毛利 久幸 P3

国際エンゼル協会より

『POSAアイキャンプ』 特定非営利法人 国際エンゼル協会 前田 泰宏 P4

『POSA』 国際エンゼル協会 バングラデシュ責任者 アジズル・バリ P5

アイキャンプ参加者より

『バングラデシュと倉富先生』 たかはし眼科院長 高橋 雄二 P6

『アイキャンプに参加して』 林眼科医師 瀧本 峰洋 P7

『アイキャンプに参加して』 阿久津医院医師 堀 秀行 P8

『アイキャンプを体験して』 (株)S U P L U S 杉戸 正和 P9

『POSAアイキャンプに参加して』 くまもと森都総合病院視能訓練士 吉田 幸代 P10

『念願のアイキャンプに参加して』 神埼ライオンズクラブ 江原 信子 P12

『アイキャンプに参加して』 神埼ライオンズクラブ 毛利伊津子 P14

『アイキャンプに参加して』 くらとみ眼科医院看護師 田中 清隆 P15

『バングラデシュにて』 山形大学医学部5年(※2011年12月時点での学年) 高橋 良太 P16

『バングラと共に』 崇城大学薬学部1年(※2011年12月時点での学年) 江崎 円香 P18

平成23年度事業報告書及び平成24年度事業計画

平成23年度・平成24年度事業報告書 P19

御支援頂いた方の一覧表 P20

POSA理事・監事名簿・POSA会員・POSA規約(一部抜粋)・入会のお願い P21

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『男の滑走路～きっと世界のどこにも 私のような男はいない～』

POSA理事長 医療法人輝秀会 理事長

倉富 彰秀



今回は、私以外に4名のエクセレントドクター、当院より2名の看護師、熊本から1名の優秀なORT、山形大学医学部生が1名、崇城（そうじょう）大学薬学部からパワフルな1名、御後援頂いているサプラス株式会社様から2名、神埼ライオンズクラブから2名、さらに井上先生のご夫人とお嬢様の2名、計16名に参加していただけた。

実際の手術はインフィニティ使用のフェイコラインと機械に頼らないE C C E ラインの2ラインで行われ、4日間で105眼の白内障手術が無事完遂された。今回も100%の症例に眼内レンズが挿入された。フェイコラインの患者さんは術翌日の裸眼視力が良い為か術後診察時の明るい喜びの表情が印象的だった。E C C E に優る点であろう。

今回も、全参加者、現地スタッフ、日本国内の後援の皆様、そして手術を受けていただいた現地の患者様、すべての方々に感謝申し上げます。

さてここ数年、ダッカへ向かう飛行機の中で、そしてバングラデシュでの手術が無事終わったダッカから東へ向かう機内で聞いている、グッとくる歌。

それは、「男の滑走路」（注1）けんさん作詞作曲。「けんさん」と言っても高倉健ではない。CKB（注2）の横山剣だ。AKBではない。

注1) YOU TUBE 「男の滑走路」で検索

注2) CKB : クレージーケンバンド

『男の滑走路』

Take off 今 空高く Airline 私は羽ばたく
人の痛みが分かる男になりたい
なり振り構わず生きて來たから
きっと世界のどこにも 私のような男はいない
でもお前にはそれが分からぬ
いいさ 分かってたまるか
機内食は肉か魚か
迷う事なく肉を選んだ
見知らぬ街のどこで行き倒れても
悔いのない死を迎えるから
アクシデント！
思わぬ出来事に もし巻き込まれても
人を笑わせる男になりたい
人を泣かせて生きて來たから
ガソリンスタンド クルマは洗車機
待ってる間にニュースを見た
色々な事が起きているんだな
でも私は今それどころじゃない
My Way シナトラのように
わたしはわたしの道を行こう
その先に何が待ち受けているようと
すべて蹴飛ばし生きて行くぜ
すべて蹴飛ばし生きて行くぜ



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『有難うアルコンさん』
POSA副理事長 菊池眼科院長
井上 望



今年でバングラデシュアイキャンプも12回目となりました。例年多くの方々に支えられているアイキャンプですが、今年はバングラデシュのアルコン社にお世話になった事をお知らせしたいと思います。眼科専門の企業である「アルコン」の名前は医療従事者以外の方には初耳かと思います。アルコンは1945年二人のアメリカ人薬剤師アレキサンダーとコナーによる創業の企業で、二人の名前を併せてアルコンと名付けられました。当初は小さな薬局からスタートしましたが、その後1980年代に急成長を遂げ現在では世界75カ国に支店を置き、その製品は180カ国以上で販売され1万2千人の従業員をかかえる医療機材のトップメーカーです。アルコンは日本において現在の主流の柔らかいレンズ（アクリルレンズ）を初めて導入し、バングラデシュにおいても眼内レンズや手術機械の9割以上のシェアがあります。

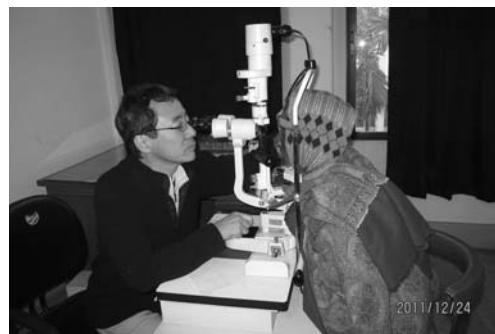
白内障手術の方法として、小さい切開で行うPEA（超音波乳化吸引術）と大きな切開で行うECCE（囊外摘出術）があります。日本では高価な機械を使用するPEAが主流です。PEAの方がECCEより手術時間が少なく、更に手術後も早くから良い視力が得られます。昨年まで私たちが行うアイキャンプではPEAの機械が無いためECCEを行っていました。PEAの機械を日本から機械を運搬したり、現地で調達するのは様々な理由から困難を要す状況です。今

回あるきっかけからアルコンのPEA機械をアイキャンプ期間中、安価で貸与してもらえる事になりました。

アルコンの方は前日から大きな機械を遠方より搬入し、手術中も2名の方が付つきりで私達には困難な機械の操作を行ってくれました。バングラデシュに、たまにしか来ないPOSAがこの高価な機械を購入する事は出来ないのはアルコンの人も分かっています。今回の手助けは私達の活動に共感して頂いたボランティア活動でした。POSAはアルコンの日本支社からも支援を受けています。日本アルコンはPOSA以外にも海外ボランティアを行うNPO支援を行っています。社会貢献する企業としての創業者の理念は世界中の社員に受け継がれていると実感しました。今回PEAで手術した患者さんは、手術翌日から良く見えると大変喜ばれていました。過去ECCEで行った時に比べて今回の方が患者さんの喜びがより大きい様でした。これもアルコンの手術機械のおかげです。

バングラデシュを去る際にアルコンの社員の方に感謝の気持ちを伝えました。「今回は機械を貸していただき本当に助かりました。来年も協力してもらおるのでしょうか？」アルコンの方は快く答えてくれました。「もちろん喜んで。来年もお会いしましょう。」そしてお互いに固い握手を交わしました。

有難う、アルコンさん！



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『アイキャンプに参加して』

神埼ライオンズクラブ 会長

毛利 久幸



倉富先生、又医療スタッフの皆様本当にご苦労さまでした。心より敬意を表します。

確かにライオンズに入会してから、様々な医療ボランティアの事を知りましたが、それも我々のこんな身近なところで、輝かしい事業成績が17年以上も永きにわたって継続して行われていたとの事を知って、少し恥ずかしい想いです。

年末の忙しい時期に、10数名の方が7日以上の日数を費やして、今回も100数名からの方を治療手術されたとお聞きしました。本当に白内障や緑内障で光を失っている人が多いことを、バングラデシュの街中や人々の暮らしぶりの現状を写真やビデオ等で見せて貰い、ホコリはする空気は汚れておりなるほどと知りました。

術後の患者さんの喜ぶ顔が印象的でした。又現地の子供たちの献身的な手伝いも関心させられるもの

がありました。

一口に労働奉仕とは言ったものの、これ程継続して行うには忍耐と根性もさることながら家族の皆様も又病院のスタッフの皆様も、同じ考え同じ気持ちでなければとても実行は難しいと思います。本当に頭の下がる思いです。

私の知る限りこの九州の周りにもこれほどの事業、活動を行っているクラブは無いと見てています。

確かに会合等で神埼ライオンズクラブを賞賛され引き合いにだされる事もしばしばですが私ども神埼ライオンズクラブも、倉富先生の活躍におんぶに抱っこであります、目だった協力が出来ずにはあります。申し訳ありません。

これからも現地の恵まれない、光を必要としている人々の思いを叶えていただきます様に切にお願します。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『POSAアイキャンプ』
国際エンゼル教会 バングラデシュ所長
前田 泰宏



今年もPOSAの皆さんをお迎えしてアイキャンプを行うことができました。日本で大変忙しい皆さんがボランティアでバングラデシュに来られ、農村で、白内障で苦しんでる人たちに光を与えてくれています。その活動も10年を超えました。国際エンゼル教会の石川理事はいつも「続いてこそ道」と言われ

ますが、継続はものすごい情熱と努力がなければできないことだと思います。国際エンゼル教会の活動も今年で30周年を迎えたが、POSAの皆さんもぜひ20年、30年とバングラデシュの視覚障害で苦しんでいる人たちに光を与え続けていただければと感謝の気持ちでいっぱいです。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『POSA』

国際エンゼル教会 バングラデシュ責任者
アジズル・バリ



今年も白内障手術で105人が見えるようになります。十数年前からPOSAと出会いがあり、毎年冬に白内障手術が行われていますが、毎年バングラデシュの農村の人たちから今年はいつからアイキャンプが行われますか、いつ日本の医師たちは来られますかと尋ねてきます。

そして私たちは白内障手術患者を選ぶために、現地の眼科医師の協力を得て11月から各農村を回ってスクリーニングを行います。そして選ばれた患者さんは12月末に日本から来られる眼科医師の皆さんを心待ちにしています。

そして実際に白内障手術を受けて目が見えるようになると、人の助けを借りることなくいそいそと喜んで田舎に帰っていきます。

POSAの皆さんが十数年絶えることなく続けて来

られたお陰で最初は本当に目が見えるようになるのか、本当に日本から眼科医師の皆さんのが来て下さるのかと疑っていた農村のみんなも今では本当に皆さんのお越しを心待ちにしています。

POSAの皆さんのがこつこつと築いてきた道が、バングラデシュの田舎で白内障で苦しんでいた人たちに大きな光を与えて、その白内障の苦しみから解放された人たちの数も年々増え続けています。

バングラデシュの政府の医療支援はまだまだ遅れています、十分手が回っていないため幼児期の栄養不足で視覚障害を持った子ども達も増えています。

その環境打破のために Lions Club の皆さんや POSA の皆さんのご協力は大変有意義で、日々農村の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『バングラデシュと倉富先生』

たかはし眼科 院長

高橋 雄二



今回のバングラデシュでのアイキャンプでのトピックスはアルコンの白内障の超音波乳化吸引術を行いうための最新の器械、インフィニティーがあつたことです。バングラデシュでの白内障手術は今までと同じく機械がなくてもできる水晶体嚢外摘出術だと思っていましたので、いろいろと日本を発つ前から器械がなくてもできる手術のイメージトレーニングをしました。また、自分の使い慣れた水晶体嚢外摘出術用の手術器械を用意してバングラデシュに持つて行きました。自分では水晶体嚢外摘出術ができるよう準備万端でバングラデシュに旅立ちました。ところが、行ってびっくり。何とも倉富先生のされることには驚きます。まさか、バングラデシュまで来てインフィニティで最新の白内障手術をすることができるとは…。今後バングラデシュの方々にも最新の白内障手術がどんどんできるようになる

と良いとおもいます。そしてやはりうれしかったのはやはり倉富先生と御一緒できたことです。新しいことを考えてそれを行ふにおこすまでの倉富先生の決断の早さはこちらが戸惑うほど。50歳を過ぎて何をしてあまり感激のなくなった私にとって、倉富先生は久々に新鮮でした。おもしろい映画に出会った感じ。それにもまして、倉富先生の陽気さは特筆すべきです。「タフでなければ、眼科医ではない。しかし、楽しくなければ、眼科医は続かない。」とはすばらしい。私の座右の銘にしようと思います。バングラデシュとかかわることができたことに倉富先生をはじめとしてくらとみ眼科のスタッフの皆様、バリさんほか現地のスタッフの皆様に感謝すると同時に、これからもおつきあいよろしくお願ひいたします。



2011/12/26

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『アイキャンプに参加して』

林眼科 医師

瀧本 峰洋



「こっち見て！上を見て、もっと上！」もちろん片言のバングラデシュ語でですが。

白内障手術器械の制御音のみが響くシーンとした手術室で、患者さんにそんな声をかけながら井上先生と手術を一人、二人と進めていきました。その日最後の患者さんが手術室を出た後どつと疲れが湧き上がってくるのを感じました。

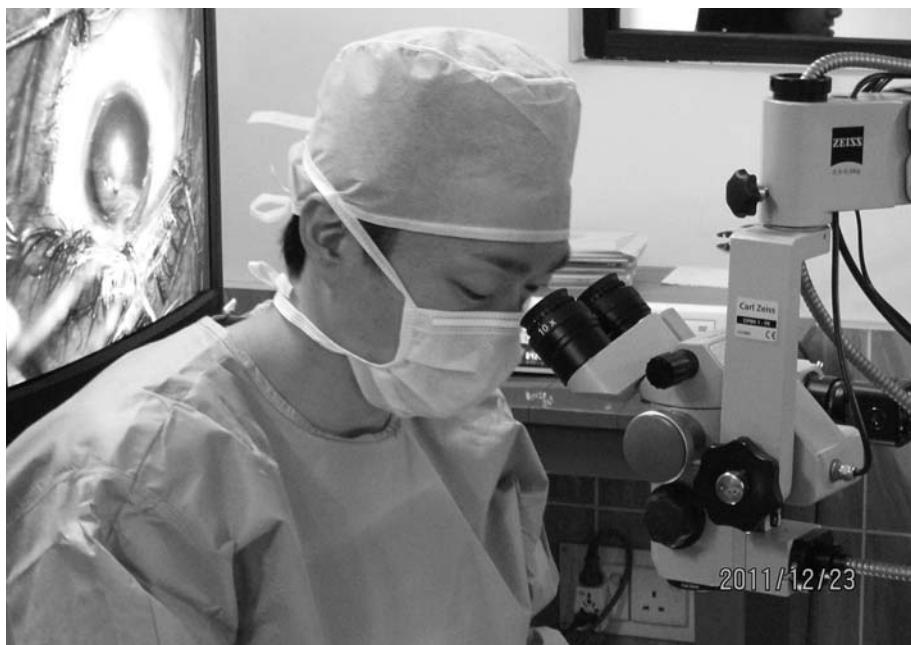
休む間もなく翌日の手術予定の患者さんの診察と術前検査です。検査を進める日本スタッフからの力のこもった声がバングラデシュの静寂な夜に活気を与えます。診察台から顔を離した患者さんは、私の「じゃあ、いいですよ。終わりでーす。」の日本語に、少し不安の入り混じった笑顔を返してくれました。白内障の診察が終わったころにはスタッフも患者さんも皆疲労の色が見え隠れしていましたが、明日への希望と充実感を感じることができました。

ようやく日本とバングラデシュのスタッフが一同そろって遅い夕食です。現地のスタッフの方がテー

ブルの周りをぐるぐる回り給仕をしてくれ、チキンカレーが背中越しに数分ごとに断るまで（遠慮しても？）追加されていきました。ちなみにこのスパイスの効いたカレーは絶品で忘れがたく、後日施設近くの市場で調合スパイスを購入し、日本に帰ってから市販のルーで作ったカレーの隠し味として使っています。

夕食後、疲れ果てた私はその後深夜まで繰り広げられた日本人スタッフのトークにほとんど参加することもできず、すぐにベッドにもぐり込み、数秒後には鼾を奏でつつ夢の国に到着したのでありました。

私は今回初めてこの医療活動に参加させていただきました。POSAの方々、エンゼル協会の方々に感謝申し上げるとともに、今回の医療活動を通じて私が経験できたことを今後の日常診療に生かし、微力ながらこれからも国際協力にかかわり続けることができればと考えています。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『アイキャンプに参加して』

阿久津医院 医師

堀 秀行



白内障とは、眼球内でレンズの働きをする水晶体が混濁する病気です。先天的な病気や全身病に合併する場合もありますが、多くは年齢的な変化によって起こりますので、誰にでも起こりうるありふれた病気です。

人類はさまざまな病気の治療法を確立し、病気と闘ってきました。しかし、実際には病気になった組織を除去するだけだったり、薬によって病気の進行を遅らせるだけであったりと、本来そなわっている機能を回復できる病気の種類は限られています。私が眼科を選んだ理由のひとつは、学生時代に見学した数々の手術の中で、眼科の白内障手術による回復レベルが、他のどんな外科系手術よりも優れており、手術後に多くの患者さんが喜んでおられたのを目撃したからです。このような満足度の高い手術を、健

康保険の整備された日本では、誰でも一部の自己負担で白内障手術を受けることができますが、バングラデシュのような開発途上国では、経済的困窮や手術をする眼科医の不足により、手術で治るはずの白内障が手術がなされないまま放置され、いまだに中途失明の原因の第一位となっているのが現実です。

バングラデシュで手術を必要としている膨大な患者さんの数からすると、1回のアイキャンプで手術できる人数はごく限られていますが、毎年活動を継続していくことによって、一人でも多くの方に”みえる”という喜びを実感していただけるよう今後もできるだけ参加を続けていきたいと思います。

この場をお借りしまして、POSAの皆様、エンゼル協会の皆様、一緒に参加させていただきました皆様にお礼申し上げます。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『アイキャンプを体験して』

株式会社SUPLUS

杉戸 正和



株式会社SUPLUSとして3回目となるアイキャンプ。12月20日にタイのバンコクを経由して21日にダッカへと向かいました。

大学時代に北京に住んでいたことのある私は、多少の雑踏や喧噪等に対しての抵抗力があると思っていましたが、バングラデシュは私の予想を更に上回る世界でした。

空港には途上国ならではの、なんのためにいるのかわからない人達がたくさんいます（パリさんに尋ねると、ほんとにヒマな人達が来ていると言っていました…）。

パリさんのお迎えもあり、一行は通常とは違うルートで車に乗り込みます。信号の無い片側4車線はあろうかという大きな道路、横から突っ込んでくるバス、バス、トラック。隙あらば道路を横切る人達。次第にアスファルトの舗装はなくなり、土がむき出しの道路に。どこそこにリキシャが見えます。更に細い路地に入り、若干心細くなってきたところでアイキャンプの地エンゼルホームに到着です。

エンゼルホームはとても広い敷地に縁がとても豊かで、ほつとしてしまいました。エンゼルホームの方たちの歓迎を受け一息ついたのち、すぐにアイキャンプの準備に入ります。周りの皆さんとの手際の良さと真剣な顔つきに圧倒されたことを覚えています。

自分が見えず仕事をすることができない現地の人

達。手術（日本では日帰り手術も可能だそうです）で視力を回復することはできる。しかしながら手術をうける手段がない（費用面、設備面、移動面など）。自分は生まれた場所が日本ということだけで、なんて恵まれているのだと考えさせられました。

初日は術前の検査で終わり、翌日からは手術、術前検査、術後検査、手術、術後検査とあつという間の3日間でした。昼食の休憩以外は休みなく働き続ける井上先生ご夫妻、瀧本先生、倉富ご婦人、田中さん、吉田さん、円香ちゃん、歩実ちゃん。私どもはかえってみなさんの邪魔にならないよう終始エンゼルホームの子供たちとスキンシップをとっていました。術中はみなさんのお役に立てず心もとなかったです。

手術が終わり、翌日のことですが手術により目が見えるようになったことを涙を流して喜んでくれていました（術後一晩は眼帯を外せません）。

バングラデシュの方なので言葉は通じませんが、みなさんから「ありがとう」という言葉が伝わってきてとても感動しました。

今回このような貴重な経験をさせていただきました、POSA倉富先生、井上先生はじめ今回キャンプ中にお世話になった方々に改めて感謝いたします。

ありがとうございました。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『POSAアイキャンプに参加して』

くまもと森都総合病院 視能訓練士

吉田 幸代



この度ご縁がありまして P O S A バングラデシュ
アイキャンプに参加いたしました視能訓練士の吉田
幸代と申します。まずは、P O S A の活動を支えて
くださっている神埼ライオンズクラブの皆様、国際
エンゼル協会の皆様、私の参加を許可してくださった
N T T 九州病院の皆様、その他多くの皆様のご協力
をいただいた上でこのプロジェクトに参加できま
したことに大変感謝しています。

今回アイキャンプに参加するにあたりバングラデ
シュのことを調べてみると、バングラデシュとは

「世界の最貧国（後発開発途上国）の一つ」また「医
療保険制度がないため一般庶民が十分な医療を受け
ることは極めて困難（外務省HPより）」とのこと
です。貧しく保険制度の確立していない国では、親
や祖父母の世代が病気になると、子どもが働いて一
家を助けなければならなくなります。教育の機会を
奪われた子が大人になった時、無学だったために重
労働で低賃金の職にしか就くことができません。さ
らに病気になった時、貧困のため十分な治療を受け
られず、またその子どもが働きに出るといった悪循



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

環がくりかえされています。私がこれから行くバングラデシュもまちがいなくこのような状況の国なのだろうなあと胸が痛くなりました。

私は視能訓練士という職種で普段は眼科外来で視機能に関する検査と訓練をしています。今回のアイキャンプでは術前・術後の検査を担当しました。術前検査では患者様お一人お一人の眼球の長さを測り、眼内に挿入（移植）する眼内レンズ（人工の水晶体）の度数を計算しました。私が行うこの検査は術後の患者様の目の度数を決定し、患者様のその後の日常生活の便利さに大きく影響する重要な検査ですので、緊張しながら且つ慎重に検査しました。初めて検査を受けられる方ばかりだから苦戦するだろうなあと思っていましたが、S U P L U S の杉戸さん、井上先生のお嬢さん・エンゼルハウスの子ども達・現地の看護師さんと私で絶妙なチームワークにより手際よく術前検査を終えることができました。手術後に簡単な目の度数の検査をしてみましたが、ほとんどの患者様は手術前に予想した通りの“日常生活に最適な目の度数”に仕上がってきました。

ところで、このアイキャンプに参加することが決まってから私自身「バングラデシュで私は何を見て、何を思うのか」と楽しみにしていました。実際私がバングラデシュで考えていたことは、私が日本で毎日勤務している病院の患者様のことでした。アイ

キャンプでの手術のために手術室の前で待っている患者様方は皆一様に不安で緊張していると思います。中には震えている方、「アラー」と神様の名前を唱える方もいらっしゃいます。手術後には良く見えるようになったと私の肩を抱いて喜んでくださる方、嬉しそうに文字を読んでいる方、何年ぶりかに見たのでしょうか鏡に映るご自分の顔をじーっと見ていらっしゃる方。このような方々を見ながら、私の病院の患者様も同じように手術の前は不安で、手術後に良く見えるようになると嬉しいのだろうなと思っていました。また術前検査の時は「この検査はこの方にとって一生の内に1度か2度しかない大切な手術のための検査なのだから」と自分に言い聞かせていましたが、白内障の手術をうけることは、私の病院の患者様一人一人の方にとっても一生の内には多くても2度しかないことなんだよなあと当たり前のことをあらためて強く思いました。このような“非日常から日常を見る経験”をできたことが大変有難く、今回のアイキャンプに参加できたことが有意義だったなと思いました。

最後になりましたが、POSAの皆様、支援してくださった日本・バングラデシュの皆様の益々のご活躍と、今回手術を受けられた患者様・ご家族の皆様のお幸せとご健康を心よりお祈り申し上げます。

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『念願のアイキャンプに参加して』

神崎ライオンズクラブ

江原 信子



12月23日より、初めて参加させていただくバングラデシュへのアイキャンプ。出発まではドキドキ不安とワクワク期待。先生方のお手伝いをし、何か役立つことがあればとの思いで、やっと念願叶い参加しました。

いよいよ異国への旅立ち。バンコクに着き空港の広いこと広いこと。倉富先生や高橋先生、堀先生方と合流し、一安心。移動は車ですが、どこに行っても渋滞。

翌日24日、いよいよ目的地バングラデシュへ。

ダッカに着くと今までの様子とはがらりと変わり、空港は人、ひと、hito、ヒト…。これは見物者と出稼ぎから帰ってくる迎えの方々との事。駐車場は隙間もないほど、ぎっしり詰まってバラバラ駐車。クラクションがどこからともなく鳴り響いている。車が止まると食べ物やお金を求める少年や赤ちゃんを抱いている見せかけのお母さんが寄ってくる。騒音、ほこり、両サイドの露天、人の列が続く。

エンゼル協会入口に近づくと扉が開き、今までとは別世界のように整備されている敷地内。エンゼル



エンゼル協会ユリコエンゼルスクール(小・中学校)校舎前にて

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

ホームにいる子ども達から歓迎の花束。孤児とは思えないような明るい子ども達。もちろん食事はカレー。夕食後、歓迎セレモニー。ホームの子ども達が歌や踊り、囃回しを等を披露し「ふるさと」の曲をきれいな日本語で歌ってくれ、懐かしく嬉しく思いました。その後に折り紙で紙ひこうきコマ作り。本を見ながらいろんなものを作り、分からぬところがあると「シスター？」と言って尋ね、自分が分かるまで徹底して聞く、子ども達の熱心に取り組んでいる様子にびっくりさせられる。

25日は、ホームの子ども達の宿舎を見学。コンクリートの大部屋に鉄枠のベッドがあり、その上には毛布(タオルケット)があるだけ。何となく淋しく、かわいそうに感じた。

学校は近くのユリコエンゼルスクールへ通学し、今は休み期間中で先生方がいるだけ。畑には野菜を栽培し、周りの樹には実がなり、にわとり、やぎ、うしを飼っており、自給自足の生活とのこと。料理スタッフの方々ともお話しし、ホーム内の女の子3人がジャガイモ切りの手伝いをしていた。どんなに小さくても食材1個も捨てずに無駄をしていないのが分かる。1つのことに熱中して取り組む姿は大きい子どもの模倣で、みんな一生懸命頑張っている様子が分かる。

戸外に出て楽しんでいる遊びとなるとバトミントンで他の遊びはほとんどないとのこと。一方、白内障手術室の前ではやや緊張の顔で順番をしづかに待っている患者さん。こんな時に励ましの言葉もかけてやることができたらいいのに…言葉の勉強不足を感じた。窓越しに見られる手術の様子。スタッフ

の先生方の一生懸命さに感動・感謝。一人ひとりの症状も違い。手術時間も違い、「本当にご苦労様です」の言葉のみでした。術後の疲れた様子の患者さんは、片目を包帯で巻き、エンゼルハウスの子ども達が手を引いて宿舎に案内していました。私はこんな手伝いをすることなく「頑張られましたね」「無事に終わってよかったです」との言葉を込めての微笑みぐらしかできませんでした。

翌日は天気も良く、患者さんたちは宿舎近くの庭に出て、子ども達と話したり、患者さん同士でおしゃべりや日光浴をしながらリラックスされ、一夜明けて顔の表情も穏やかに感じられました。いよいよ手術を受けられた方々とのお別れ式。患者さんは会場に集まり、大きな瞳から「ありがとう」「ありがとう」の感謝いっぱいの表情でした。

一人ひとりにサングラスをかけ渡している時に「私にも早くして!!」「おれにも早くしてくれ!!」と待ちわびている様子。「ありがたい嬉しいよ」と、ささやかれている感じでした。先生方から丁寧に目薬のさし方を教えてもらい患者さんも理解されたことでしょう。直接、患者さんに何のお手伝いもできなかつたのに、片手をしっかりと握りしめたり、肩に手をやり優しく何回も何回もなでおろしながら、言葉はなくとも「ありがとう、ありがとう」の心温かい態度が伝わってきました。もっと早く気付いて、何か手助けしてあげることができたのではと後悔。

105名の患者さんに手術をされた眼科の先生方、スタッフの方々、私にとって忘ることのできない、貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございました。深く感謝しております。

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『アイキャンプに参加して』

神崎ライオンズクラブ

毛利伊津子



今回はじめてバングラデシュのアイキャンプに参加させていただきました。

かねてから興味を持っていたとはいえ何の準備もないまま、道中は倉富先生方を頼りに現地に入りました。

以前参加された方からの情報通りの街の様子でしたがエンゼルホームの子供達に笑顔で歓迎を受け心がなごみました。と同時に“おじゃまします”という気持ちになりました。

白内障の手術を待つ患者さん達は不安な中にも全幅の信頼をよせておられる様子、手術を終えた人達は何のお手伝いもできなかつた私にも体いっぱい使って感謝の気持ちを表現して下さいました。

患者さん達によりそい何かとお世話するホームの

子供達の姿に感動させられました。

先生方も手術はもちろんのこと、手術前日と手術後の診察、又手術を終えてから夜遅くまでのミーティングなど等々、お疲れの様子もみせずにパワフルに動いておられました。こういったボランティアを17年間も続けておられる先生方に尊敬の念を抱かずにはおれません。大変な事でしょうがこれからもますますのご活躍を期待しております。

これから先、アイキャンプの事を一人でも多くの人に知ってもらう事が私の唯一のつとめと思っております。

貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『アイキャンプに参加して』

くらとみ眼科医院 看護師

田中 清隆



今回で、インドも合わせると5回目のアイキャンプ参加となりました。

毎年、各メーカーの皆様より眼内レンズやアイドレープなどの協賛、POSA会員の皆様と一般の皆様からの寄付金やタオルの御支援を頂き感謝申し上げます。おかげさまで、2011年12月21日（水）～2011年12月28日（水）までの日程でバングラデシュ眼科医療援助を無事行う事ができました。

毎年、POSAでは、中古のフェイコマシーン（白内障手術装置）の購入を考えていきましたが、この機械は、とても高額なため、購入できませんでした。しかし、今年のアイキャンプでは、国際エンゼル協会バングラデシュ現地責任者のアジズル・バリさんの御尽力により、医療機器メーカーのアルコンの

フェイコマシーン（白内障手術装置）インフィニティをアイキャンプの期間中使用することができました。

このインフィニティは、白内障により混濁した水晶体を取り除く最新の小切開白内障手術装置です。術後の患者様の見え方に影響する乱視や合併症を起こしにくいとても良い装置です。

また、当院でも、インフィニティを導入したばかりで、現地での設定や操作には、多少不安がありました。しかし、現地に行ってみると、アルコンの社員の方がすべての設定と操作を担当してくれたので、本当に助かりました。アルコンに感謝しています。

最後に、参加して頂いた方々、有り難うございました。また、来年もよろしくお願ひ致します。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『バングラディシュにて』

山形大学医学部5年

高橋 良太



バングラディシュとはどのような国であるか？

人口が多く、人口密度がとても高い国である。国旗が日本の国旗と似ている。ぱつと言われて思いつくのはこの2つぐらいの物であると思う。事実、自分もこの二つと、父が言っていたトイレに手を洗うための壺があり、車が人力車と一緒に走っているという冗談みたいな話ぐらいしか知らなかつた。その話を聞かされた時も、人力車はともかく、トイレに壺？と思いつながらも、自分と接点があるような国でもないし、そんな国もあるのだなと認識を少し変え

ただけだった。

しかし、何の因果かバングラディッシュに行くことになってしまった。しかも、家族旅行だと聞いていたのに出発する前に一人抜け、二人抜けして何故か父親と自分の二人きりである。クリスマスと日程がかぶっている以上、彼女、彼氏がいる姉弟が来ることはなかつたのだろうが、彼女のいない自分が少しくなると同時に、出不精の自分としてはうまく逃げやがつたなと臍（ほぞ）をかむ思いだつた。

いつの間にかバングラディッシュの首都、ダッカに



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

着いてしまっていた。日本人はすごく目立って人が集まると聞かされたので、警戒しながら空港を出ると…、入り口に椅子に腰掛け自動小銃を持ち警備をしている人がいた。

風に舞う砂で汚れた半袖長ズボンの迷彩服によく日焼けして乾燥した肌、腰掛けている椅子は切り出した木材をそのまま組んだような粗末なもので、片膝をついて自動小銃を片手に気怠げに周りを見回している様は、今まで感じたことのない、「日常の中に当たり前のように存在している」自分にとっての非日常を感じた。まるで簫（ほうき）でも持つような雑な持ち方、ろくに手入れしていない為であろうか、付いたままになっている砂埃など、ダッカの空港は、ここは戦場なのか？と疑うような場所であった。

これは予想以上にとんでもない所に連れてこられた、自分は滞在中に紛争とかに巻き込まれて死ぬのではないか？と割と真剣に考えたが、そんな考えも空港からエンゼル協会までの移動の際に消えてしまった。

車がクラクションを鳴らし続け、バスは通路を塞ぐように動き、人力車がその間を縫うように走る。どこかにしっかり捕まっていないと不安になるような道路事情に加え、観光客に物をもらおうとして車についてくる人々。エンゼル協会までの道のりは事

故を起こすのではないかという気持ちと、車についてくる人の現地の言葉と訴えかけるような目を気にしないようにするので精一杯だった。

エンゼル協会に着いて、子供たちに歓迎された。初めのうちは、エンゼル協会に来るまでのこともあり、警戒して荷物からは絶対に目を離さないようにしないようにと、意気込んでいたが、エンゼル協会にいる子供たちはやんちゃであるが、とても素直で、人を疑うことしないような人ばかりだった。職員の方々も誠実な人ばかりで、車に置き忘れた財布をわざわざ自分の部屋まで届けてくれるようなこともあった。

バングラデイシュではバドミントンとバレーが流行っているらしく、年に何度か大きな大会があるらしい。バドミントンと一緒にやらせてもらい、一人で大汗をかく自分に群がる大量の蚊を見て子供たちと笑ったのが印象的だった。

今回の訪問で自分が学んだことは、手術室に入り手術の手伝いをすること、術後の患者さんの視力を測定すること、子供たちに遊んでもらったこと、トイレに壺があるような、(本当にあった。)日本とは全く違う世界があると言うことだった。

医学生という立場からだけでなく、一人の人として、このような体験をすることが出来たことを光栄に思い、感謝したいと思う。

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『バングラと共に』

崇城大学薬学部1年

江崎 円香



沢山の夢と希望を引き連れ、高校1年の冬、私は初めてバングラの大地を踏みしめました。それから4年間、バングラの人々と触れ合うことにより、将来に向けての揺るぎない軸定めを行うことが出来ました。

そして現在私は薬学について学んでいます。大学生になると色々なことに挑戦をしたくなるものです。しかし、その中でも最も行いたいことは「バングラの為に何か一つでもアクションを起こす」ことでした。そして私が出来ること、やりたいことを考えた結果、それは現地での薬剤調査でした。人々の発展と共にある医療、その医療を全面的に担ってい

るもののが薬剤です。この点、開発途上国であるバングラでの調査はとても興味深く、将来途上国の医療実態の改善にも繋がると思い、調査を行うことにしました。

多くのスタッフの方々のご協力によって、複数の医療施設で調査をスムーズに行うことが出来ました。心から感謝を申し上げます。今後も長期的に調査を行いたいと思っておりますので、ご協力の方をどうぞ宜しくお願ひいたします。また、アイキャンプのオペにおいても、今後とも共に活動できるようご指導の方をどうぞ宜しくお願ひいたします。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



平成23年度事業報告



〈バングラデシュ眼科診察

及びスクリーニングアイキャンプの実施〉

実施期間：平成23年4月1日から平成24年3月31日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル

エンゼルアソシエーション（IAA）本部

クリニック施設にて

派遣員：現地眼科医及び現地助手

看護師 2 名

視能訓練士 1 名

一般参加 8 名

倉富 亜由美

田中 清隆

吉田 幸代

井上 麻記

井上 歩実

江崎 円香

江原 信子

柴田 一馬

杉戸 正和

高橋 良太

毛利伊津子

対象患者数：105名

〈バングラデシュアイキャンプの実施

及びビタミン配布〉

実施期間：平成23年12月23日から平成23年12月26日まで

実施期間：平成23年12月23日から平成23年12月25日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル

エンゼルアソシエーション（IAA）本部

クリニック施設にて

派遣員：

眼科医 5 名

井上 望 倉富 彰秀

高橋 雄二 澤本 峰洋

堀 秀行

活動内容

今回バングラデシュアイキャンプも12回目となりました。現地の眼科疾患の症例及び1360名の患者さんを対象としたスクリーニングアイキャンプ及び105名の白内障手術を実施しました。

国内啓発活動

バングラデシュアイキャンプへの寄贈品、募金、参加の呼びかけ

バングラデシュの現状についての啓発活動

平成23年度事業報告書

平成24年度事業計画

〈バングラデシュ眼科診察

及びスクリーニングアイキャンプの実施〉

実施期間：平成24年4月1日から平成25年3月31日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル

エンゼルアソシエーション（IAA）本部

クリニック施設にて

派遣員：現地眼科医師及び現地助手

〈バングラデシュアイキャンプの実施

及びビタミン配布〉

実施期間：平成24年12月20日から平成24年12月27日まで

実施期間：平成24年12月22日から平成24年12月24日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル

エンゼルアソシエーション（IAA）本部

クリニック施設にて

派遣員：日本からの眼科医師及び看護師

現地眼科医及び現地助手

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



温かいご支援ありがとうございました。

平成23年4月～平成24年3月

敬称は省略させていただきます。(順不同)

紙面の都合上、掲載されていない方もおられます。ご了承ください。

寄付者

菊池眼科患者様

松本 アヤ
松本 いく子
若山 久栄
高濱 結樹
小柳 衛

くらとみ眼科医院患者様

小田 英夫
樋口 マサ子
森山 寅春
香月 富士雄
中尾 美津枝
牟田 フジノ
小野 ヤエ子

タオル 増田 巖
田島 恵美
中園 富子
神代 幸枝

眼鏡 最所 満子
中島 キサノ
手嶋 菊枝
三好 澄江
蓑原 和子



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



POSA理事・監事名簿

理 事 長	倉 富 彰秀	(医療法人 輝秀会 理事長)
副理事長	井上 望	(医療法人 菊池眼科 理事長)
理 事	橘 光幸	(橘商事 代表)
	榎本 純一	(大坪内科医院)
	野口 守	(萬永堂 代表)
	林 敢為	(国際ライオンズクラブ 337-C地区 名誉顧問)
監 事	末永 博義	(末永司法書士事務所 代表)
	田中 雅美	(田中雅美税理士事務所 代表)

(敬称略・五十音順)

POSA名誉会員

名譽会員	古川 康	(佐賀県知事)
	中尾 清一郎	(佐賀新聞社長)

(敬称略・五十音順)

POSA一般会員

芥川 泰生	(株)神埼薬局	高橋 良太	副島 武	与那嶺 豊
(株)アステム	倉富 亜由美	瀧本 峰洋	堀 秀行	
東 キヨ子	財部 貴資男	田中 清隆	松本 博	
伊崎 祐介	柴田 一馬	田中 博都	毛利 伊津子	
井上 香奈子	杉本 拓也	田邊 樹郎	(株)毛利工務店	
宇野 光次	杉戸 正和	(株)日本点眼	森岡 千鶴子	
江崎 円香	世戸 憲男	八谷 臨	安谷 久美子	
江原 信子	参天製薬(株)	原 康夫	山口 克宏	
大島 博	高橋 雄二	秀島 正博	吉田 幸代	

(敬称略・五十音順)

POSA（ポサ）規約（一部抜粋）

(目的)

第3条 本会は、眼科衛生学に関する知識の普及及び白内障・緑内障に対する研究・ボランティア活動を行い、視覚障害者の減少に寄与することを目的とする。

(入会金及び会費)

第7条 正会員は、入会金壱万円、及び年会費壱万円を納入しなければならない。

POSA一般会員入会を隨時受け付けております。ご連絡下さい。(POSA事務局 田中)

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



Project Operation Sight for All

POSA 事務局

〒842-0002 佐賀県神埼市神埼町田道ヶ里2435-1

医療法人 輝秀会 くらとみ眼科医院

TEL : 0952-52-8841 FAX : 0952-52-8765

ホームページアドレス <http://www.posaoffice.net/>

E-mailアドレス posa@train.ocn.ne.jp

2012年7月発行